

アカショウビン *Halcyon coromanda* (Latham)

【選定理由】

夏期に、丘陵地から山間部の森林に生息し繁殖する。県内の生息状況は必ずしも明らかでないが、元来数が少なく、生息が確認されている地域での道路建設や開発により餌場となる谷や沢が埋められており、絶滅の可能性が増大していると考えられる。

【形態】

全長 27cm。赤くて大きな嘴が目立つ。上面は赤褐色で下面は淡褐色、腰の中央に光沢のある水色の縦線がある。脚は赤色。



三重県伊勢市, 1992年6月17日, 石井照昭 撮影

【分布の概要】

インド東北部、ネパール、バングラデシュ、ミャンマー北部、マレー半島、中国、台湾、朝鮮半島南部に分布し、北方のものはフィリピン、マレー半島、スマトラ、ジャワなどに移動する。8亜種にわけられ、日本には2亜種が分布し夏期にほぼ全国的に生息する。

県内には、夏期に山間部に生息する。春と秋の渡り時期には、平野部や丘陵地で記録されることがある。

【生息地の環境 / 生態的特性】

夏期に広葉樹林や混交林に生息し、湿った斜面や沢筋で、サワガニ、カタツムリ、大型昆虫などを捕食する。朽ち木やスズメバチの巣などに横穴を穿って営巣する。キョロロロロ・・・と鳴く。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の営巣は、豊根村、設楽町などで確認されている。数は少ないが尾張東部から西三河、東三河の丘陵部や山間部で繁殖期の観察記録がある。丘陵部や山間部での道路建設や開発により、餌場となる谷や沢が埋められることで生息環境が喪失している。

【保全上の留意点】

沢筋の広葉樹林や針広混交林を保全する必要がある。

丘陵地や山間部での道路建設や開発を行う場合は、谷や沢の生物層に配慮して工事を行うことが重要であり、必要があればトンネルや橋梁に変更すること。切り盛り工事の場合も水系と生態系の回復を考慮した工法が必要である。

【関連文献】

五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.96. 文一総合出版, 東京.
竹下信雄, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.185. 世界文化社, 東京.

カワガラス *Cinclus pallasii* Temminck

【選定理由】

丘陵地から山間部にかけての河川に周年生息し繁殖するが、移動性が少ない種であり河川の環境が悪化すればその河川から姿を消すことになる。近年は観察記録が減少しており、県内の河川中上流域の河川環境が悪化していると考えられる。2006年以降の調査において、県内における生息範囲と生息数の減少が確認されたことで、初版の準絶滅危惧から絶滅危惧Ⅱ類と評価された。

【形態】

全長 21～23cm。全身が黒褐色でずんぐりした体形。脚は黒褐色で前面が銀色。幼羽は、前頸から腹にかけて汚白色の斑がある。成鳥の虹彩は茶色。



京都府, 1986年3月16日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

アフガニスタン、トルキスタンからヒマラヤ、インドシナ北部から中国、台湾、朝鮮半島、ウスリー、サハリン、千島、カムチャツカに分布。日本には、屋久島以北に周年生息し繁殖する。

県内には、丘陵地から山間部にかけての河川に周年生息する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

丘陵地から山間部の岩の多い河川や溪流に周年生息し繁殖する。なわばり性で、季節移動は少ない。水中を翼を用いて泳ぎ、また水中を歩いて水棲昆虫、甲殻類、魚類を捕食する。溪流の中の岩の間、滝の裏側、倒木の陰などにコケを使って球形の巣を作る。ピーツ、ピーツと鳴き、チーチージョイジョイと囀る。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

近年は、都市に近い丘陵地ではほとんど見ることができなくなった。減少の要因は明らかでないが、丘陵地の沢は水量が不安定なうえ、河川改修などの改変が施され営巣や採餌の環境が悪化したことが考えられる。

【保全上の留意点】

丘陵地から山間部の河川の自然性確保に努める必要がある。

【関連文献】

五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.154. 文一総合出版, 東京.

コマドリ *Erithacus akahige* (Temminck)

【選定理由】

夏期に山間部の原生林に生息するが、生息地は限られており数も少なく、かつ1970年代と比較して減少傾向が認められるため、絶滅の可能性が増大していると考えられる。

【形態】

全長14cm。頭部から上胸及び尾は鮮やかな橙赤褐色。背と翼の上面は暗赤褐色、腹と下尾筒は灰白色。上胸と腹の境は、雄は黒帯があり区分が明瞭だが、雌は黒帯がなく不明りょうで全体的に色が淡い。嘴は黒色で脚は黄褐色。



長野県売木村, 1993年5月1日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

サハリン、南千島、日本で繁殖し中国南部で越冬する。日本では、亜種コマドリ *E. a. akahige* が夏期に九州以北に生息するほか、亜種タネコマドリ *E. a. tenensis* が伊豆諸島南部、屋久島、種子島に周年生息する。

県内では、夏期に山間部の原生林に生息し繁殖する。春と秋の渡り時期には、市街地でも見られることがある。

【生息地の環境 / 生態的特性】

山間部の広葉樹林や針広混交林のササ類など下草が密生する場所に生息し、地上の物陰に広葉樹の枯葉や枯れ草を主材とするわん形の巣を作る。下草の中からはめったに出ない。ヒン、カラララ・・・・と大きな声で囀る。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の生息地は、段戸裏谷、面の木峠、茶臼山、漆島川（豊根村）など山間部の原生林に限られており、数も少ない。段戸裏谷では、1990年代以降に数が減少した。減少の要因は原生林の面積減少、原生林内の道路等の整備による林内環境の悪化、人間の立入数の増加などが挙げられる。

【保全上の留意点】

県内に残る原生林を周辺環境と共に保全し、原生林内外の沢や道路等の整備等を行う場合は環境に及ぼす影響を十分に考慮しなければならない。また原生林内への入山者が増えていることから、必要に応じては立入禁止区域の設定等の措置を行って、自然環境を保全することも必要である。

【特記事項】

県内における主要な生息地である段戸裏谷では、2000年頃から外来種のソウシチョウ *Leiothrix lutea* が侵入しており、本種との競合が懸念される。

【関連文献】

五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.160. 文一総合出版, 東京.
緒方清人, 1996. 段戸裏谷の野鳥. 愛知の野鳥 1996. pp.233-243. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.
竹下信雄, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.214. 世界文化社, 東京.
原田猪津夫, 1983-1998. 野生鳥類生息調査報告書, 茶臼山. 愛知県農地林務部, 名古屋.

アカハラ *Turdus chrysolaus* Temminck

【選定理由】

夏期に標高 1,000m 程度以上の原生林に生息するが、生息数は極めて少ない。原生林周辺の環境が悪化していることから、県内における繁殖個体絶滅の可能性が増大していると考えられる。

【形態】

全長 23.5cm。頭部から上面にかけて、一様にオリーブ味のある褐色。下面は腹の中央部が白いほかは橙赤色。雄は頭部の黒味が強く、雌は喉に白色の縦斑がある。亜種オオアカハラ *T. c. orii* は、雄の頭部の黒味がより強く、体がやや大きく嘴が太い。



長野県売木村, 1988 年 6 月 10 日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

サハリン、南千島、日本で繁殖し、台湾、中国南部、フィリピンで越冬する。2 亜種に別けられ、本州中部以北で繁殖するものを亜種アカハラ *T. c. chrysolaus*、南千島などで繁殖するものを亜種オオアカハラとし、後者は日本で越冬する。

県内では、夏期に山間部の原生林に少数が生息し繁殖する。冬期には都市公園など平地でも少数が見られ、春と秋の渡り時期にはより多く見られる。

【生息地の環境 / 生態的特性】

山間部の明るい原生林に生息し繁殖する。地上で昆虫やミミズを捕食するほか、樹上で木の実を食べることもある。囀りはキョロン、キョロン、ツイーツ、地鳴きはツリーツと聞こえる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

夏期の生息地としては、茶臼山と面の木峠が知られるが局地的で数もごく少ない。かつて森林が明るく植生が多様であった頃は、標高のより低い場所にも生息していた可能性がある。

【保全上の留意点】

県内に残る原生林を周辺の環境と共に保全し、原生林内外の沢や道路等の整備等を行う場合は環境に及ぼす影響を十分に考慮しなければならない。また原生林内への入山者が増えていることから、必要に応じては立入禁止区域の設定等の措置を行って、自然環境を保全することも必要である。

【関連文献】

五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.185. 文一総合出版, 東京.

竹下信雄, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.224. 世界文化社, 東京.

原田 進, 1981. 東三河野鳥生息状況調査報告書(1). 東三河野鳥同好会.

コジュリン *Emberiza yessoensis* (Swinhoe)

【選定理由】

冬鳥として埋立地のヨシ原や沿岸部の農耕地に生息するが、数が少なく生息環境も安定しないため、絶滅の可能性が増大していると考えられる。

【形態】

全長 14.5cm。雄の夏羽は頭部全体と上胸が黒色、雌は頭部が暗褐色で汚白色の眉斑と顎線がある。背は赤褐色で淡褐色と黒色の縦斑があり、胸は淡い褐色で腹は白い。腰は赤褐色。嘴はまっすぐで、色は夏羽で黒く冬羽では肉色。



茨城県, 1985年7月14日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

中国北東部、ウスリー、南千島で繁殖し、北方のものは冬期に移動し、朝鮮半島南部、中国南東部で越冬する。日本では本州中部以北および九州で繁殖するが局地的で、本州中部以南の沿岸部で越冬する。

県内では、冬期に主に伊勢湾、三河湾沿岸のヨシ原や農耕地に生息する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

冬期に、埋立地のヨシ原や休耕地で主に単独で観察されるが、ヨシや草むらの中を潜行するため姿を見る機会はごく少ない。チツ、チツと細い声の地鳴きをする。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

鍋田地区周辺、矢作川河口周辺、汐川干潟周辺で記録があるが、生息状況は明らかでない。目につき難い種であり、沿岸部のヨシ原や農耕地の縮小に伴い、人知れず減少している可能性がある。

【保全上の留意点】

沿岸部や河口部の広大なヨシ原を保全するとともに、県内における生息状況をより明らかにする必要がある。

【関連文献】

五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.255. 文一総合出版, 東京.
竹下信雄, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.248. 世界文化社, 東京.

ホオアカ *Emberiza fucata* Pallas

【選定理由】

夏期に山間部の草原に生息し繁殖するが、繁殖地は局所的で繁殖数はごく少なく、現在の生息環境が変動した場合は愛知県内から繁殖個体が絶滅する危険性が高まる。冬期は平野部の農耕地や水路の土手などで見られるが数は多くない。県内繁殖種として絶滅の危険性が極めて高くなっていることで、初版準絶滅危惧から絶滅危惧Ⅱ類と評価された。

【形態】

全長 16cm。夏羽は、頭部が青灰色で黒色の縦斑があり耳羽は赤褐色で、背は褐色で黒褐色の太い縦斑があり、下面は白色で胸に黒色と茶褐色の2本の横帯があり脇に明瞭な縦斑がある。冬羽は、頭部と下面に褐色味を帯びる。尾は褐色で外側尾羽2対に白色斑があり、脚は肉色。



静岡県朝霧高原, 1987年6月28日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

ヒマラヤ西部、中国北東部および南部、シベリア南東部、モンゴルで繁殖し、北方のものは南下し、冬期に朝鮮半島南部からインドシナ北部に生息する。日本では、夏期に九州以北で繁殖し、北方のものは冬期に暖地へ移動する。

県内では、夏期に山間部の高原に生息し繁殖する。冬期には、平野部の農耕地などに生息する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

夏期に高原や牧場など、山間部の開けた草地に生息し繁殖する。草原の中の草株の根元に、枯草を主材とするわん形の巣を作る。草の種子を主食とする。冬期は、平野部の農耕地や水路の土手などに単独から数羽の小群で生息する。チツチン、チチチュ、チチュと早いテンポで囀る。地鳴きは、チッと聞こえる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

1980年代までは豊田市の三河高原牧場や茶臼山の牧場などでも繁殖期に観察されていたが、現在では確認されなくなっている。最も確認数の多かった池ノ平牧場でも近年は確認されないこともあり、愛知県内での繁殖個体はほぼ絶滅に近い状態にある。原因として、県内における畜産業の形態変化などが考えられる。

【保全上の留意点】

山間部の草原と周辺を保全できる牧畜産業の振興が望まれる。

【関連文献】

五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.259. 文一総合出版, 東京.
竹下信雄, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.249. 世界文化社, 東京.
深見 弘ほか, 1984. 探鳥地ガイド西三河, pp86-87, 96-97. 西三河野鳥の会, 岡崎.

ノジコ *Emberiza sulphurata* Temminck et Schlegel

【選定理由】

日本の固有種で本州の一部でのみ繁殖が知られている種であり、生息数も少ない。県内での繁殖期の生息が確認されているのは茶臼山だけであり、年により繁殖期の確認がされないことも少なくないことから、愛知県における繁殖種として絶滅の危機にあると考えられ、初版情報不足から絶滅危惧Ⅱ類と評価された。

【形態】

全長 14cm。頭部は灰緑色で、眼先は黒色で眼の周囲に白色の細い縁取りがある。背は暗灰緑色で暗褐色の縦斑があり、大雨覆と中雨覆の先端は汚白色で2本の翼帯に見える。喉は黄色で胸から腹にかけて汚黄色で、脇に灰緑色の縦斑がある。嘴は灰色で脚は肉色。雌は、眼先は黒色でなく、雄に比べて頭部の緑色味が少なく、下面の黄色も淡い。



石川県舩倉島, 1997年5月3日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

繁殖地としては日本のみが知られ、冬期は台湾、中国南部、フィリピン北部に生息する。

日本では、夏期に本州(青森県から兵庫県)に生息し繁殖するが局地的。本州西部以南では冬期の記録もある。

県内では、東三河地方の山間部に生息するが、ごく局地的である。春と秋の渡り時期には平野部でも記録がある。

【生息地の環境 / 生態的特性】

本州の山間部の疎林で繁殖するが局地的である。林縁の低い樹枝上に、枯草などでわん形の巣を作り通常3~5卵を産卵する。チョンチョイピーピリッピなどと囀る。地鳴きはズツ、ズツと聞こえる。春と秋の渡りの時期には、平野部の雑木林などで少数が記録される。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

現在県内で繁殖期に生息する場所は茶臼山周辺のみが知られる。牧場やスキー場周辺の開けた林で見られるが、近年は全く確認されない年が多くなっている。茶臼山の観光開発進展や施設の整備により生息に適した環境が悪化しているものと考えられる。

【保全上の留意点】

山間部の草原およびその周辺の明るい林を保全し、中長期的には新たに創出していくことが望ましい。

【特記事項】

1930年代には、段戸山西川地区で本種が「一般に繁殖していた」という記録が残されている。

【関連文献】

五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.270. 文一総合出版, 東京.
夏目五一郎, 1936. 段戸山の鳥(二). 野鳥, 第3巻第7号, pp.20. 日本野鳥の会, 東京.
柳澤紀夫, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.253. 世界文化社, 東京.

ヒメウ *Phalacrocorax pelagicus* Pallas

【選定理由】

冬期に遠州灘や三河湾、知多半島の岩の多い海岸に生息するが、数が減少傾向にある。本県では自然の岩礁地が少なく、加えて生息地に対する人の侵入が増加しており、生息条件が悪化している。

【形態】

全長 63～73cm。全身が緑色光沢を帯びた黒色で、体形、特に嘴と頸が細い。夏羽は、顔の裸出部が赤く、頭頂と後頭の2ヶ所に房状の冠羽があり脚の付け根に白斑が出る。冬羽は、顔の裸出部が黒く、冠羽は目立たず脚の付け根の白斑はない。幼羽は、冬羽に似るが、全身が黒褐色で光沢がない。



茨城県波崎, 2002年3月9日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

千島列島、カムチャツカ、サハリンから北アメリカの太平洋岸にかけて分布する。日本では、北海道、本州北部、九州の日本海側で繁殖し周年生息するが、本州中部以南では冬期に生息する。

県内では、冬期に遠州灘沿岸、三河湾西部及び知多半島に生息する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

自然の岩礁が発達した海岸に生息し、巧みに潜水し主に魚類を捕食する。ウミウとともに見られることが多く、海岸の岩礁で休息し周辺の海域で採餌する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の生息地として、遠州灘沿岸と三河湾島嶼部および知多半島南部が知られ、伊良湖岬周辺と田原市（旧赤羽根町）高松一色の岩礁地でよく見られる。近年は、岩礁部への人の侵入の増大に伴い、休息場所が安定せず、数が減少傾向にある。

【保全上の留意点】

海岸の岩礁を保全する必要がある。

【関連文献】

- 桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.64. 文一総合出版, 東京.
原田 進, 1987. 東三河南部の冬鳥 -1985年1月野鳥棲息調査報告書, pp.39. 東三河野鳥同好会, 豊橋.
吉井 正, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.44. 世界文化社, 東京.
渡辺幸久, 1992-1998. 野生鳥類生息調査結果報告書(渥美古山), 愛知県農林部, 名古屋.

クログアモ *Melanitta nigra* (Linnaeus)

【選定理由】

冬期に遠州灘や三河湾の海域に生息するが、数は多くない。1980年代半ばまでは普通に見られ越夏群も確認されていたが、近年は個体数が大きく減少した。

【形態】

全長 44～54cm。雄は、全身が黒色で、上嘴の基部に黄色のこぶ状の突起がある。雌は、全身が暗褐色で頬と喉が淡灰色で、嘴は黒色。



愛知県渥美半島, 1990年2月12日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

ユーラシア大陸北部、アラスカ西部、ハドソン湾の一部、ニューファンドランド島、アイスランドで繁殖し、ヨーロッパ沿岸。アフリカ北西部沿岸、カムチャツカから中国にかけての沿岸、北アメリカ西海岸および東海岸で越冬する。日本では冬期に全国の海岸部に生息する。

県内では、冬期に遠州灘や三河湾の海域に生息し、少数は湾の深部でも記録される。

【生息地の環境 / 生態的特性】

冬期に遠州灘や三河湾の沖合いに生息し、汐川干潟、豊川河口、矢作川河口などの三河湾深部でも記録がある。潜水採餌をし、貝類や甲殻類を捕食するとされ、1973年に田原市（旧田原町）で越夏個体を捕獲し調査したところ、ムラサキイガイを数多く摂食していた。三河湾田原市（旧田原町）沿岸の越夏個体群は、岸に上がっていることが多かった。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

1970年代には三河湾の田原市（旧田原町）沖で 1,000羽を超える越冬群が見られ、1973年7月に白谷海岸で 199羽の越夏群の記録がある。また、冬期には遠州灘沿岸、内海から師崎にかけても普通に見られた。近年は、三河湾では馬草海岸（田原市）を除きほとんど見ることができず、遠州灘沿岸で数羽から数十羽の群れが記録されるに過ぎない。

【保全上の留意点】

餌となる貝類や甲殻類を確保するため、浅瀬など海域環境の保全に努める必要がある。

【関連文献】

- 小柳津 弘, 1987. 田原町裏浜(片浜-宇津江境)の野鳥. 伊良湖 NO.18. pp.11. 伊良湖自然科学博物館. 渥美町.
桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.143. 文一総合出版, 東京.
黒田長久, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.77. 世界文化社, 東京.
原田 進, 1987. 東三河南部の冬鳥 -1985年1月野鳥棲息調査報告書, pp.37. 東三河野鳥同好会, 豊橋.

ミサゴ *Pandion haliaetus* (Linnaeus)

【選定理由】

伊勢湾・三河湾沿岸を中心に主として冬期に生息するが、三河湾島嶼部で繁殖記録が 1 例あるだけで、繁殖種の側面からは希少である。

【形態】

雄は全長 56～60cm、翼開長 147～166.5cm、雌は全長 57.5～61.5cm、翼開長 154～168.5cm。背と翼上面が暗褐色で、頭部から腹にかけての下面は白色で、目先から頸側を経て後頸にいたる太くて暗褐色の帯がある。胸に黒色と暗褐色の縦斑からなる帯があることが多い。雄は雌に比べて胸の帯が淡く、幼羽は雨覆の羽縁が明瞭。他のタカ類に比べて翼が長く、飛行時は尾が短く見える。



愛知県幡豆郡一色町, 2006年12月25日, 駒井恒博 撮影

【分布の概要】

広く世界に分布し、北方のものは冬期に南下する。5 亜種に分けられ、ユーラシア大陸から北アフリカ及び東アジア、フィリピンからインドネシア及びオーストラリア北部、オーストラリア南部及びタスマニア、北アメリカから南アメリカ、バハマ諸島及びキューバに分布するものが知られる。日本では、九州以北で繁殖し周年生息するが、北海道では夏鳥で、本州中部以西では冬期によく見られる。

県内では、主に冬期に伊勢湾、三河湾沿岸、河川で見られ、繁殖例もある。

【生息地の環境 / 生態的特性】

海岸、河川、湖沼などの上空を飛び時に停止飛行を行いながら水中の魚を探し、ダイビングして捕まえ、河畔林の樹上などに運び採食する。浅瀬のノリそだや杭に止まって休息することも多い。人が近寄りやすい海岸の断崖や尖塔状の岩の頂上、水辺付近のマツやモミなどの大木に営巣することが多い。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内での繁殖は三河湾島嶼部で 1 例が確認されているのみ。木曾岬、三河湾沿岸、新豊根ダムなど繁殖期の記録は稀でないが営巣の確認はできていない。魚類の捕食を経由した残留性農薬や PCB 汚染による減少が指摘され、世界的に減少傾向とされるが、近年、庄内川河口をはじめ伊勢湾や三河湾の各地ではそれぞれ数羽から 10 羽が生息しており緩やかな回復傾向にあると考えられる。

【保全上の留意点】

沿岸の海域や河口域の健全な水環境を確保し、急峻な断崖や岩場、水辺付近の森林を一体的に保全する必要がある。営巣地においては、人の干渉を排除するなど繁殖環境を適切に管理することが望ましい。ヨーロッパでは、近年、人工の巣台での繁殖が報告されている。

【関連文献】

森岡照明・叶内拓也・川田 隆・山形則男, 1995. 図鑑 日本のワシタカ類, pp.10-21. 文一総合出版, 東京.

オオタカ *Accipiter gentilis* (Linnaeus)

【選定理由】

近年は平野部や都市部への進出例が多く確認されるようになったが、いずれも周辺には広大な農地や河川敷など餌場の存在が不可欠である。平野部における営巣場所は猛禽の繁殖には極めて不安定で脆弱であり、容易に消滅するおそれがある。

【形態】

全長は雄が47～52.5cm、雌が53.5～59cm、翼開長106～131cmの雌雄二型。成鳥は頭部から背と翼上面にかけて暗青灰色で、白く明瞭な眉斑があり、下面は白色で、胸から腹および脛にかけて黒褐色の細かい横斑がある。幼鳥は上面が褐色で下面が淡黄褐色で、胸から腹にかけて暗褐色で明瞭な縦斑がある。脚は黄色で、尾に太く明瞭な横帯がある。飛行時は、他のタカ類に比べて尾が長めで翼が短かめに見える。



愛知県知多郡美浜町, 2005年11月8日, 駒井恒博 撮影

【分布の概要】

ユーラシア大陸と北アメリカ北部に広く分布し、7～10 亜種に分けられ北方のものは冬期に南へ移動する。日本では、北海道と本州に周年生息し繁殖し、四国、九州では主に冬期に生息する。国内で繁殖する亜種オオタカ *A. g. Fujiyamae* のほか、亜種シロオオタカ *A. g. albidus* が稀に北日本で記録される。

県内では、丘陵地から山間部の林に周年生息し繁殖する。冬期には河川敷や農耕地など平野部でも見られる。

【生息地の環境 / 生態的特性】

アカマツなどの営巣に適した高木を含む森林と、農地などの開けた場所がパッチ状に存在する環境などに生息し、主に鳥類、時に小型の哺乳類を捕食する。非繁殖期には雄がテリトリーに残り雌は移動するものと思われ、冬期に海岸部や河畔林などに生息するものの大半は雌または幼鳥である。なお、秋期に伊良湖岬を渡る個体は幼鳥が多い。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

近年、県内各地で丘陵地だけでなく平野部での繁殖が相次いで確認されている。本種は、本来丘陵地で繁殖するものであり、平野部への進出は本種の生息条件の悪化を示唆しているものと考えられる。

大規模開発に伴う環境影響調査で生息が確認されることが多いが、それ以外でも規模の小さな開発行為が各地で行われている。

【保全上の留意点】

種の保存法により「国内希少野生動植物種」に指定されている。繁殖期に生息が確認されている場所においては、高利用域を特定し保全する必要がある。同時に、河川敷の林など越冬環境の保全にも十分留意する必要がある。

【特記事項】

近年、本来の生息環境が喪失するのに伴い、周辺に餌場があれば都市部でも繁殖が確認されるようになっているが、これは周辺の自然環境の保全と住民の干渉がない条件の上に成り立つ特異な繁殖環境であり、僅かな環境変化や、猛禽の性質に熟知しない観察や写真撮影などの干渉があれば容易に放棄される不安定なものであるため、継続には困難な要素が多い。

【関連文献】

森岡照明・叶内拓也・川田 隆・山形則男, 1995. 図鑑 日本のワシタカ類, pp.84-97. 文一総合出版, 東京.

ツミ *Accipiter gularis* (Temminck et Schlegel)

【選定理由】

平野部から山間部の林に生息し繁殖するが数は少ない。生息状況は不明な点が多いが、既知の生息地は限られており生息条件の変動によりさらに減少する可能性がある。

【形態】

全長は雄が 25～27.5cm、雌が 28.5～31.5cm、翼開長 51.5～62cm の雌雄二型。雄は頭部から背と翼上面にかけて暗青灰色、下面は白く胸から脇にかけて淡橙色で、目は暗紅色。雌は上面に暗褐色味を帯び、下面は白く胸から脇、脛にかけて暗褐色の細かい横斑があり、目は黄色く細い眉斑がある。幼鳥は雌に似るが、胸に縦斑があり脇の横斑は太くて粗い。飛翔時は、他のタカ類に比べて頭が大きめで翼が短かめに見える。



愛知県知多郡美浜町, 2006年10月13日, 駒井恒博 撮影

【分布の概要】

中央シベリア南部からモンゴル北部、中国東北部、朝鮮、アムール地方、ウスリー地方、サハリンで繁殖し、冬期は中国東南部、台湾、東南アジアなどに生息する。日本では、北海道、本州、四国、九州、南西諸島で繁殖する。南西諸島に周年生息するものは、亜種リュウキュウツミ *A. g. iwasakii* に分けられる。

県内では、平地から丘陵地及び山間部の林に生息し、一年を通じて記録がある。

【生息地の環境 / 生態的特性】

丘陵地や山間部の混交林から平野部の都市公園に生息し、繁殖する。主に小型の鳥類を捕食し、アカマツやヒノキなどで営巣することが多い。県内では一年を通じて記録があるが、非繁殖期の生息状況は明らかでない。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

繁殖期の記録は、丘陵地や山間部に限られており、営巣は新城市（旧作手村）などごく少数が知られるのみであったが、1994年に名古屋市内の公園で繁殖が確認された。関東地方の調査結果から、都市部への生息地拡大は限界があるものと推察されるため、今後は再び平野部から姿を消す可能性がある。

【保全上の留意点】

丘陵地の雑木林を保全するとともに、緑化の推進など都市の自然性向上に努める必要がある。

【特記事項】

日本では、1970年代までは繁殖例が数例しか確認されておらず生息状況など不明な点が多かったが、1980年代半ば以降、関東の都市近郊を中心に繁殖記録の報告が相次いだ。1991年以降は横ばいで推移した後、1990年代後半から再び減少傾向にあるとされる。減少の要因として、営巣適地の減少やハシブトガラスの増加といった繁殖環境の悪化があげられている。

伊良湖岬では、秋の渡り時期にシーズン計約 1,000羽が通過する。

【関連文献】

伊良湖岬の渡り鳥を記録する会, 2000. 伊良湖岬のタカの渡り. タカの渡り 2000, pp.36-46. タカの渡り全国集会 in 信州実行委員会, 長野.

森岡照明・叶内拓也・川田 隆・山形則男, 1995. 図鑑 日本のワシタカ類, pp.108-119. 文一総合出版, 東京.

Mutsuyuki Ueta, 2000. Changes of distribution in Japanese Lesser Sparrowhawks and their possible causes. Proceedings of The First Symposium on Raptors of Asia. pp.358-362.

ハイロチュウヒ *Circus cyaneus* (Linnaeus)

【選定理由】

冬期に、主に伊勢湾、三河湾沿岸部のヨシ原および周辺の農耕地に生息するが数はごく少ない。こうした環境は変動性が高いためさらに減少する可能性がある。

【形態】

全長は雄が43～47cm、雌が48.5～53.5cm、翼開長は98.5～123.5cmの雌雄二型。雄は、上面全体と顔から胸および尾羽が淡灰色で、腹が白く外側初列風切が黒い。雌は、上面が全体的に暗灰褐色で、下面は淡褐色または赤褐色で前頸から腹にかけて暗褐色の縦斑があり、風切と尾は灰褐色で太くて明瞭な横斑があり、腰が白い。雄、雌ともに目と脚が黄色。幼鳥は雌に似るが、目の色が暗褐色。



奈良県, 1990年3月25日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

極北を除くユーラシア大陸北部と北アメリカ大陸北部で繁殖し冬期は南下する。冬期はユーラシアでは、ヨーロッパ中南部、中近東北部、インド北部、インドシナ北部、中国南東部、台湾、朝鮮半島南部などに生息する。日本では、冬期に北海道から九州にかけて渡来し、南西諸島からも記録がある。

県内では、冬期に伊勢湾、三河湾沿岸のヨシ原および周辺の農耕地に生息し、時に内陸の高原や里山で記録されることがある。

【生息地の環境 / 生態的特性】

冬期に、沿岸部のヨシ原を中心に周辺の農耕地を含む広い行動圏を持ち、低空を軽やかに飛び回り地上のネズミ類や小型の鳥類を捕食する。ヨシ原で、チュウヒに混じり1～数羽でねぐらをとることが知られている。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の安定した生息地は、鍋田地区周辺、矢作川河口周辺、豊川河口周辺、汐川干潟周辺の農耕地にほぼ限られ、数もごく少ない。越冬のためには、農耕地や荒地などの餌場と、ねぐらを形成するためのヨシ原が一体的に確保される必要があるが、こうした環境は遊休地の土地利用や植生の遷移により喪失されやすい。

【保全上の留意点】

沿岸部や河口部に形成される広大なヨシ原および周辺の農地を保全する必要がある。

【関連文献】

森岡照明・叶内拓也・川田 隆・山形則男, 1995. 図鑑 日本のワシタカ類, pp.256-271. 文一総合出版, 東京.

クイナ *Rallus aquaticus* Linnaeus

【選定理由】

冬期に平野部の淡水湿地に生息し、かつては広く県内各地で普通に見られたが、近年は減少傾向にある。池沼の埋め立てや改変、河川や水路の改修による岸边環境の改変により、生息条件が悪化している。

【形態】

全長 28～29cm。成鳥は、頭頂、後頸から体上面は暗いオリーブ色で黒色の縦斑がある。顔、喉、胸は青灰色で、腹、脇は黒色地に白色の横斑がある。嘴は長めで赤く、冬羽では上嘴が黒っぽい。幼鳥では、顔に褐色味が強い。



愛知県刈谷市, 1985年11月1日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

ユーラシア大陸の温帯域で繁殖し4亜種に分けられる。北方のものは南下し、冬期には中国南部、東南アジアなどに生息する。日本では、北海道と本州北部では夏期に生息し、本州、四国、九州、南西諸島では冬期に生息する。

県内では、主として平野部に冬期に生息するが、丘陵地や山間部でも記録がある。

【生息地の環境 / 生態的特性】

冬期に平地から低山の休耕田や湿田、河川や池沼の畔水田などの淡水湿地に、単独または数羽で生息し小動物を捕食する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

かつては、県内の平野部広くで普通に見られたが、護岸や水草の除去などにより水辺環境が人工化され、特に都市近郊で生息地が減少した。山間部における生息状況は明らかでないが、数は少ないものと考えられる。

【保全上の留意点】

水田を含む淡水湿地を保全し、水辺の自然性回復に努める必要がある。

【特記事項】

県内で繁殖記録が1例あり、1975年6月に犬山市の水田で巣卵が発見されている。その他、豊橋市石巻町で繁殖期の観察例がある。

【関連文献】

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.165. 文一総合出版, 東京.

シロチドリ *Charadrius alexandrinus* Linnaeus

【選定理由】

県内の干潟や砂浜で一年を通じて普通に見られるチドリであり、千鳥の名の通りかつては 1,000 羽の群れも見られた。汐川、矢作川河口、名古屋港周辺における調査で年間最大観察数の合計は、干潟の埋め立てが進められた 1970 年代後半でも 2,000 羽を超えていたが、近年では 250 羽程度にまで減少しており、さらに減少の傾向がみられることで、初版リスト外から準絶滅危惧と評価された。

【形態】

全長約 17cm。雄の夏羽は頭頂が茶褐色で、上面、雨覆は灰褐色。前頭には黒帯があり、額と眉斑は白色。過眼線と胸側は黒色。喉から体下面は白色。雌は頭頂、過眼線、胸側が茶褐色。雄の冬羽や幼鳥は雌に似る。嘴は黒色。脚は青灰色。虹彩は暗褐色。



愛知県幡豆郡一色町, 1997 年 5 月 25 日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

13 亜種が、全世界の温帯から熱帯地域に分布する。国内では北海道から南西諸島で繁殖し、渡りを行うものもいる。

県内の干潟や沿岸部では一年を通して生息し、平野部にある河川の下流域から河口及び沿岸部で繁殖する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

河川下流域の河原や沿岸部の砂地が本来の繁殖場所であるが、干拓地や埋立地の砂地でも繁殖する。海岸堤防のコンクリート上でも繁殖例があるが継続していない。冬期は干潟を中心に群れを作って生息する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

繁殖地である河川下流域の砂地環境は、河口堰の建設や護岸工事による客土の投入などにより減少している。沿岸部の砂地も埋め立てや護岸工事により消失している。干拓地内に存在していた砂地は農地や建造物、公園などに改変されてほとんどが消失している。埋立地内の砂地は短期間に改変されるもので安定した繁殖環境ではないが、近年はさらに工事サイクルの短縮化や埋立場所が海上沖に移動したことにより、営巣場所として適さなくなっている。

【保全上の留意点】

河川及び沿岸部の管理では砂礫環境の保全につとめ、区域を定めて人の干渉を排除するなど、この種を含む生物全体の生息環境を保全するための積極的な管理が必要である。また、早急に沿岸部の埋立地などに、ある程度の面積を確保して砂地や湿地の環境を復元することで、この種を含む愛知県本来の沿岸生物の多くが絶滅の危機から救われることになる。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.114. 世界文化社, 東京.

オジロトウネン *Calidris temminckii* (Leiser)

【選定理由】

春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸部の水田や蓮田、休耕田など平野部の淡水湿地に渡来し、一部は越冬するが数は少ない。沿岸部に多数存在した淡水湿地の埋め立てや、水田の転作による乾燥化により淡水湿地環境が消滅し、淡水湿地である水田から餌となる生物が消失したことで、生息可能な環境が喪失している。

【形態】

全長 13～15cm。夏羽は、頭から胸および上面全体が黄褐色または赤褐色で、黒色の斑がある。冬羽は、頭から胸および上面が一般的な灰褐色。幼羽は、冬羽に似るが上面の肩羽や雨覆に羽縁がある。嘴は、トウネンに比べて細めで、脚は黄色味がある。



愛知県西尾市, 1990年10月26日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

ユーラシア大陸北部沿岸で繁殖し、アフリカ東部、インド、東南アジアなどで越冬する。日本には、春と秋の渡り時期に渡来し、本州中部以西では冬期も生息する。

県内では、主に春と秋の渡り時期に、伊勢湾、三河湾沿岸はじめ平野部の淡水湿地に生息し一部は越冬する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

水田や休耕田、埋立地の水たまり、河川敷などに単独から数羽で生息し、水中や地上の小動物を捕食する。干潟など海岸域に出ることはほとんどない。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の主な生息地として、愛西市（旧立田村）、鍋田周辺、一色町、矢作川河口周辺、汐川干潟周辺があげられる。元来数が少ないが、近年は記録頻度が減少した。特に、冬期は水田が乾燥するため、越冬に適した淡水湿地はごく限られる。

【保全上の留意点】

国内でも愛知県はこの種の代表的な生息地といえる程確認数が多く、越冬例も多かった。越冬可能な条件は冬期も凍結しない水路等の存在と、餌となる生物が多く生息していることである。水田に本来の生態系を回復するための努力が必要である。

【関連文献】

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.202. 文一総合出版, 東京.
真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.122. 世界文化社, 東京.

コオバシギ *Calidris canutus* (Linnaeus)

【選定理由】

春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸部の干潟に渡来するが、数は少ない。干潟など沿岸域の湿地の喪失に伴い個体数が減少し、近年では限られた場所にごく少数が生息するに過ぎない。

【形態】

全長 23～25cm。夏羽は、上面は黒褐色で背や肩羽に赤橙色の羽が混じり、顔および下面は様な赤橙色。冬羽は、上面が様な灰褐色で羽縁が白く、下面は白色で胸から脇かけて灰褐色の斑があり、白い眉斑がある。幼羽は、冬羽に似るが上面の褐色味がやや強く、白い羽縁の内側に細い黒褐色帯がある。嘴は黒く、脚は暗緑色。飛行時は、腰が白く見えるが上尾筒に灰褐色の斑がある。



愛知県西尾市, 1995年9月16日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

シベリア北部、北アメリカ北部、グリーンランドで繁殖し、西ヨーロッパ、アフリカ、中南米、オーストラリアで越冬する。2 亜種に分けられる。日本には、北海道から沖縄にかけて全国に春と秋の渡り時期に渡来する。

県内では、春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸の干潟に生息するが、春期の記録は多くない。

【生息地の環境 / 生態的特性】

春期は3月から5月中旬頃まで、秋期は7月から10月にかけて、干潟や埋立地の水溜まりに生息し単独から数羽で小動物を捕食する。オバシギ群中で見られることが多い。春期の記録は少ない。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

干潟など沿岸部の湿地の消失により、生息地は庄内川河口・藤前干潟、矢作川河口周辺、豊川河口周辺、汐川干潟、伊川津などに限られている。かつてはこれらの地区で数羽、時には20羽以上の群も見られ、1973年の春期には飛島村の干潟で50羽の記録がある。しかしながら、現在は数が減少し、尾張、西三河地区では全く見られない年もある。

【保全上の留意点】

現存する干潟を保全するとともに、沿岸部で失われた湿地の再生に努めることが望ましい。

【特記事項】

1996～1998年の春期と秋期の計6回、国内延336箇所で行われたシギ・チドリ類カウント調査では、本種のシーズン総数は最大71羽（1997秋期）であり、全国的にも数が少ない種といえる。

【関連文献】

小柳津 弘ほか, 1974-1998. 野生鳥類生息調査結果報告書(汐川河口). 愛知県農林部, 名古屋.

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.210. 文一総合出版, 東京.

藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之, 1997-1999. シギ・チドリ類全国カウント報告書 vol.1-vol.6. 日本湿地ネットワークシギ・チドリ委員会, 豊橋.

松原敬親ほか, 1977-1998. 野生鳥類生息調査結果報告書(矢作川河口). 愛知県農林部, 名古屋.

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.124. 世界文化社, 東京.

オバシギ *Calidris tenuirostris* (Horsfield)

【選定理由】

春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸部の干潟や干拓地の池、水田などに渡来するが、数は多くない。干潟など沿岸域の湿地の喪失に伴い個体数が減少し、近年では限られた場所に小群が生息するに過ぎない。

【形態】

全長 26～28cm。夏羽は、上面が黒褐色で灰色の羽縁があり肩羽は赤褐色、頭中央から頸にかけて灰色で細かい縦斑があり、下面は白く胸と脇に大きな黒色の斑がある。冬羽は、上面が一様な灰褐色で、頭から胸にかけて細かい縦斑があり、不明瞭な白い眉斑がある。幼羽は、上面が暗褐色で淡褐色の羽縁があり、胸に太くて明瞭な縦斑がある。嘴は黒く基部は太め、脚は暗緑色。飛翔時は、腰が白く見える。



愛知県幡豆郡一色町, 1994年6月1日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

シベリア東北部で繁殖し、インド、東南アジア、オーストラリアで越冬する。日本には、北海道から沖縄にかけて全国に春と秋の渡り時期に渡来する。

県内では、春と秋の渡り期に伊勢湾、三河湾沿岸の干潟に生息する。数は、春に比べて秋の方が多い。

【生息地の環境 / 生態的特性】

春期は4月上旬から5月中旬頃まで、秋期は8月から10月にかけて干潟に生息し、数羽から数十羽の群をなし主に干潟や水田でゴカイや貝類等を捕食する。干潟ではダイゼンやオオソリハシシギなどと一緒に見られることが多い。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の主な生息地として、庄内川河口・藤前干潟、矢作川河口周辺、豊川河口周辺、汐川干潟があげられる。1978年の秋期に汐川干潟で116羽の記録があるが、近年は30羽前後を推移している。また、1981年の秋期に矢作川河口で53羽の記録があるが、近年は数羽が見られるに過ぎない。干潟や沿岸部の湿地が消失し、個体数が著しく減少した。

【保全上の留意点】

現存する干潟や湿地を保全するとともに、沿岸部で失われた湿地の再生に努めることが望ましい。

【特記事項】

シギ・チドリ類の全国調査において、愛知県内でカウントされた本種の個体数は、1981～1983年の秋期が最大156羽～最小97羽、1996～1998年の秋期が最大112羽～最小88羽と減少している。

【関連文献】

小柳津 弘ほか, 1974-1998. 野生鳥類生息調査結果報告書(汐川河口). 愛知県農林部, 名古屋.

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.238. 文一総合出版, 東京.

日本野鳥の会研究部, 1982-1984. シギ・チドリ類全国一斉調査 1981年, 1982年, 1983年報告. strix vol.1-vol.3. 日本野鳥の会, 東京.

藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之, 1997-1999. シギ・チドリ類全国カウント報告書 vol.1-vol.6. 日本湿地ネットワークシギ・チドリ委員会, 豊橋.

松原敬親ほか, 1977-1998. 野生鳥類生息調査結果報告書(矢作川河口). 愛知県農林部, 名古屋.

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.136. 世界文化社, 東京.

ミユビシギ *Crocethia alba* (Pallas)

【選定理由】

冬期に渥美半島および知多半島の沿岸に生息するが数は少ない。かつては、遠州灘沿岸の各所で小群がいくつか見られたが、近年は安定的に見られる生息地は限られ、数も減少した。

【形態】

全長 20～21cm。夏羽は、頭部、上面、胸は赤褐色で黒色の軸斑があり、下面は白色。冬羽は、頭部、上面、胸は一様な淡灰色で下面は白色。幼羽は、上面に黒色の軸斑があり白黒の格子柄に見える。嘴と脚は黒色で、後趾がなく他のシギ類と異なり趾は3本。飛翔時は翼の白帯が明瞭で、翼角の周辺が黒っぽく見える。



愛知県西尾市, 1987年9月19日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

シベリア中部、北アメリカ北部、グリーンランドで繁殖し、冬期は、オーストラリア、東南アジア、中近東、アフリカ、南北アメリカに生息する。日本には、北海道から沖縄にかけて全国に春と秋の渡り時期に渡来し、本州中部以南では越冬する。

県内では、冬期に遠州灘から三河湾南西部の海岸に生息し、少数は主に秋期に三河湾奥部や伊勢湾の干潟に渡来する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

冬期は12月上旬から3月中旬頃まで砂浜や砂質干潟に小さな群をなして生息し、秋期は8月から10月にかけて、干潟や埋立地の水溜まりに単独から数羽で渡来する。春秋の渡りの季節は内湾の干潟や湿地で見られることもあるが、冬期は主に渥美半島の砂浜で波打ち際や干潟汀線際を小走りしながらせわしなく餌を採る様子が見られる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

冬期は、豊橋市から田原市（旧渥美町）にかけての遠州灘沿岸と三河湾の田原市（旧渥美町）沿岸および美浜町から南知多町にかけての海岸に生息するが、安定して見られる場所は田原市（旧赤羽根町）大石、伊川津干潟、中山地先などに限られており、かつてに比べて生息地が局所化し個体数も減少した。減少の要因は明らかでないが、海岸への人の侵入の増加、砂浜の後退などが考えられる。

【保全上の留意点】

遠州灘沿岸の砂浜および三河湾沿岸の砂質干潟を保全する必要がある。

【特記事項】

本種をオバシギ属 *Calidris* に分類する説もある。

【関連文献】

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.212. 文一総合出版, 東京.

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.124. 世界文化社, 東京.

Hayman, P., Marchant, J. And Prater, T., 1986. Shorebirds, An Identification Guide to the Waders of the World. pp.365-366. Christopher Helm, London.

エリマキシギ *Philomachus pygnaeus* (Linnaeus)

【選定理由】

春と秋の渡りの時期に、沿岸部の水田や水路、池沼など主に淡水の湿地に渡来するが、数は少ない。沿岸域の淡水や汽水の湿地は少なくなっており、干拓地の水田は麦や大豆への転作により餌となる生物が消滅して、生息条件が悪化している。

【形態】

全長は、雄が26～32cm、雌が20～25cm。雄の完全な夏羽は頸に襟巻状の飾り羽がある。夏羽（または中間羽）は、頭部、上面、頸、胸、腹にかけての色合いが鮮やかで、頭部が白色のもの、橙色のもの、頸が褐色のものなど個体により変化が大きい。雌の夏羽は、上面が淡褐色で黒褐色の斑があり頸から胸にかけて褐色の斑がある。冬羽は雌の夏羽に似るが、頸から胸の斑が淡い。幼羽は全体が黄褐色、上面は暗褐色の黄白色の羽縁がある。脚の色は赤色、灰緑色など多様。



愛知県西尾市, 1987年4月23日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

ユーラシア大陸北部で繁殖し、アフリカ、中近東、インド、オーストラリア南部で越冬する。日本には、春と秋の渡り時期に渡来し、一部は越冬する。

県内では、春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸の干潟や水田などの湿地に生息し、ごく少数は越冬する。稀に内陸の水田で記録される。

【生息地の環境 / 生態的特性】

春期は3月下旬から5月中旬頃まで、秋期は7月下旬から10月にかけて、水田、水溜まり、干潟など主に沿岸部の湿地に渡来し、単独から数羽で生息する。秋期に幼鳥を見ることが多いが、春季渡去の前には名前の通り美しい襟巻き状の飾り羽を纏った雄を観察することもある。冬期に環境の良い水田や水路があれば越冬することもある。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の主な生息地として、鍋田周辺、愛西市（旧立田村）、矢作川河口周辺、一色町周辺、汐川干潟周辺、豊川河口周辺などがあげられ、休耕田や中小河川などで越冬することもある。元来数が少ないことに加え、沿岸部の湿地は少なくなっており、生息条件が悪化している。

【保全上の留意点】

水田を含む沿岸部の淡水湿地および干潟を保全すること、遊休の埋立地や干拓地等に淡水から塩水までの様々な湿地を創生する必要がある。

【関連文献】

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.217. 文一総合出版, 東京.
真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.126. 世界文化社, 東京.

オオハシシギ *Limnodromus scolopaceus* (Say)

【選定理由】

春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸の水田や水溜まり、干潟などの湿地に渡来するが、元来数が少なく、限られた場所に少数が生息するに過ぎない。沿岸域の湿地は少なくなっており、生息条件が悪化している。

【形態】

全長は 24～30cm。夏羽は、顔から頸および下面が赤褐色で暗褐色の斑があり、腹から下尾筒にかけては横斑状で、頭中央と上面は暗褐色。冬羽は、頭部から頸および胸にかけて灰褐色で、上面は濃灰褐色、腹から下尾筒にかけては白色で暗褐色の横斑がある。幼羽は冬羽に似るが、背と肩羽の羽縁は赤褐色で、全体に褐色味が強い。嘴は太くて長く、脚は黄緑色。飛翔時、下背から尾にかけて白く見え、翼後縁に細い白線がでる。



愛知県幡豆郡一色町, 1993年8月11日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

北東シベリア、アラスカ西海岸で繁殖し、アメリカ西海岸、メキシコ西海岸などで越冬する。日本には、春と秋の渡り時期に渡来し、一部は越冬する。

県内では、春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸の水田や水溜まり、干潟などの湿地に生息し越冬することもある。

【生息地の環境 / 生態的特性】

春期は4月から5月まで、秋期は8月から11月にかけて、沿岸部の水田、水溜まり、干潟などの湿地に渡来し、単独から数羽で生息し越冬することもある。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の主な生息地として、鍋田周辺、愛西市(旧立田村)、矢作川河口周辺、一色町、汐川干潟周辺などがあげられ、休耕田や干潟などで越冬する。立田村の水田では、1999～2000年の冬期に12羽が記録された。元来数が少ないことに加え、沿岸部の湿地は少なくなっており、生息環境が狭くなっている。

【保全上の留意点】

農地を含む沿岸部の淡水湿地および干潟を保全する必要がある。

【関連文献】

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.220. 文一総合出版, 東京.

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.128. 世界文化社, 東京.

アカアシシギ *Tringa totanus* (Linnaeus)

【選定理由】

春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸部の水田や休耕田、干潟や水たまりなどに渡来する。元来数が少なく、淡水の限られた湿地に少数が生息するに過ぎない。沿岸域から環境の良い淡水湿地は少なくなっており、生息条件が悪化している。

【形態】

全長 27～29cm。夏羽は、顔、頸、胸にかけて暗褐色で明瞭な縦斑が密にあり上面は暗褐色、眉斑は不明瞭で目の周辺に白い縁取りがあり、嘴の基部と脚は鮮赤色。冬羽は、頭から上面および胸が灰褐色で、顔や頸などの縦斑は目立たない。幼羽は、背や雨覆の羽縁が黄褐色、眉斑は長めで目の後でも明瞭、嘴の基部と脚は橙赤色。次列風切と初列風切の一部が白色で、飛翔時は太い白帯に見える。上背と腰が白く、尾は白地に暗褐色の横斑がある。



沖縄県宮古島市, 1993年8月11日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

ヨーロッパ東部、中央アジア、中国東北部で繁殖し、ヨーロッパ沿岸部、アフリカ、中東、インド、東南アジアで越冬する。6亜種に分けられる。日本には、春と秋の渡り時期に全国に渡来するが、北海道東部では少数が繁殖し、南西諸島では普通に越冬する。

県内では、主に春と秋の渡り期に伊勢湾、三河湾沿岸の干潟や水田地帯に生息する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

春期は、4月から5月、秋期は7月から10月にかけて渡来する。主として淡水の湿地に単独から数羽で生息するが、塩水の干潟に入ることもある。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の主な生息地として、愛西市（旧立田村）、鍋田周辺、矢作川河口周辺、一色町、汐川干潟周辺があげられる。沿岸部の湿地は少なくなっており、生息環境が狭小化している。

【保全上の留意点】

淡水系水鳥を保護するためには、生息地である水田の稲作の継続を基本として、水田本来の生態系を保った形の淡水湿地環境を保全し、自然性の回復に努める必要がある。

【特記事項】

1996～1998年の春期と秋期の計6回、国内延336箇所で行われたシギ・チドリ類カウント調査では、本種のシーズン総数は最大188羽（1998秋期）となっている。このうち沖縄県内でカウントされた数が約140羽であり、九州以东では非常に数が少ない種といえる。

【関連文献】

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.223. 文一総合出版, 東京.

藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之, 1997-1999. シギ・チドリ類全国カウント報告書 vol.1-vol.6. 日本湿地ネットワークシギ・チドリ委員会, 豊橋.

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.122. 世界文化社, 東京.

メリケンキアシシギ *Heteroscelus incanus* (Gmelin)

【選定理由】

外洋性のシギで国内では極めて数の少ない種であり、春と秋の渡りの時期に太平洋に面した海岸の岩礁に飛来して生活するが、県内では飛来する岩礁が限られている。他の場所に飛来することは極めて稀であることから、限られた飛来地である岩礁の環境が変化すれば、県内から絶滅することとなるため、初版リスト外から準絶滅危惧と評価された。

【形態】

体長約 28cm。雌雄同色。夏羽は頭頂から上面は灰褐色で下面全体は白黒の縞模様。冬羽では下面の模様が淡くなる。飛翔中の翼は上下面とも灰黒褐色。嘴は黒色、基部はやや淡色で、まっすぐ。脚は汚黄色。第一回冬羽は成鳥冬羽に似るが、雨覆に白斑がある。



愛知県渥美半島, 1988年5月20日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

本州、四国、小笠原諸島、伊豆諸島などで稀な旅鳥として記録されるが、一部越冬するものもいる。アラスカのほか一部はシベリア東北部でも繁殖するらしい。冬は南カリフォルニア、ハワイ諸島、中央・南部太平洋諸島、オーストラリアなどに渡る。亜種はない。

【生息地の環境 / 生態的特性】

渥美半島の太平洋に面した海岸の岩礁に定期的に飛来する。岩礁や干潟に生息するといわれるが、県内で生息するのは大半が岩礁に限られている。単独あるいは数羽でみられることが多く、節足動物や貝、ゴカイなどを食べる。ピッピッピッと連続して鳴く。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内での生息地は渥美半島の特定した岩礁に限られており、生息数も1羽あるいは数羽である。近年は釣りやサーフィンなどのレジャーで訪れる人口が増大しており、生息地周辺に多くの人立ち入るようになっている。今後人による何らかの干渉がこの岩礁に及ぶことがあれば、生息環境が喪失することになる。

【保全上の留意点】

今後の状況に注意しながら、人による干渉が生息地に及ばないような配慮が必要である。

【関連文献】

稲田浩三, 1996. 愛知の野鳥 1995, pp.64. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.
真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.133. 世界文化社, 東京.

オオソリハシシギ *Limosa lapponica* (Linnaeus)

【選定理由】

干潟を主な生息地とするシギである。かつては春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸部の干潟に渡来する大型シギの代表であったが、近年は飛来数が減少しており、良好な干潟環境が減少していることで生息条件が悪化している。

【形態】

全長 37～41cm。夏羽は、頭頂および上面は黒褐色で背や肩羽に赤橙色の羽が混じり、顔および下面は一樣な赤橙色。冬羽は、上面が灰褐色で羽縁が白く、下面は灰白色。幼羽は、冬羽に似るが肩羽と三列風切の褐色の軸斑に淡黄褐色の斑があり、ぎざぎざ模様に見える。嘴は長くてやや上に反り、基部が肉色で先端が黒い。腰は白色で上尾筒と尾羽に黒褐色の横斑がある。



愛知県幡豆郡一色町, 1985年9月18日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

ユーラシア大陸北部、アラスカ西部で繁殖し、ヨーロッパ、アフリカ、中東、東南アジア、オーストラリア、ニュージーランドの沿岸部で越冬する。2 亜種に分けられ、日本に分布するのはユーラシア大陸の東部に生息する亜種であるが、西方に分布する亜種の飛来記録も僅かにある。日本には、北海道から沖縄にかけての全国に春と秋の渡り時期に生息する。

県内では、春と秋の渡り期に伊勢湾、三河湾沿岸の干潟に生息する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

春期は3月下旬から5月中旬頃まで、秋期は7月から10月にかけて主に広大な干潟に生息し、数羽から数百羽の群をなし貝類やゴカイ類などを捕食する。春期に比べて秋期は数が少ない。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

干潟など沿岸部の湿地の消失により、生息地は庄内川河口周辺・藤前干潟、飛島干潟、矢作川河口周辺、豊川河口周辺、汐川干潟などに限られている。最大の生息地は伊勢湾奥部で、1980年代には300羽以上の群が見られたが、近年は50羽程度に大きく減少した。矢作川河口周辺においては、1980年代には30羽以上が定期的に渡来したが、近年は数羽程しか見られない。

【保全上の留意点】

現存する干潟を保全するとともに、沿岸部で失われた干潟の再生に努めることが望ましい。

【特記事項】

最近の衛星を使った調査では、ニュージーランドで越冬した個体が春の渡りでは韓国を経由してアラスカ西部に渡り、秋の渡りではアラスカからニュージーランドまでノンストップで渡っている例が明らかにされている。

【関連文献】

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.236. 文一総合出版, 東京.

藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之, 1997-1999. シギ・チドリ類全国カウント報告書 vol.1-vol.6. 日本湿地ネットワークシギ・チドリ委員会, 豊橋.

松原敬親ほか, 1977-1998. 野生鳥類生息調査結果報告書(矢作川河口). 愛知県農林部, 名古屋.

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.134-135. 世界文化社, 東京.

ダイシャクシギ *Numenius arquata* (Linnaeus)

【選定理由】

伊勢湾、三河湾沿岸の広大な干潟に、冬期または春と秋の渡り時期に生息するが、干潟の喪失に伴い個体数が減少した。

【形態】

全長 50～60cm。上面は淡褐色で、頭頂から背、肩羽、雨覆に暗褐色の斑があり、雨覆の羽縁に淡黄褐色の小斑がならぶ。顔、頸、胸は淡褐色の地に暗褐色の縦斑があり、腹と下尾筒は白色。腰は白色で背までくいこみ、上尾筒と尾は淡褐色で黒褐色の斑がある。嘴はとても長く、大きく下に湾曲する。雄雌同色だが、雌の方が雄よりも大きい。



大分県, 1999年12月5日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

ユーラシア大陸北部、アラスカ西部で繁殖し、ヨーロッパ、アフリカ、中東、東南アジア、オーストラリア、ニュージーランドの沿岸部で越冬する。2 亜種に分けられる。日本には、北海道から沖縄にかけて全国に春と秋の渡り時期に生息する。

県内では、冬期または春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸の干潟に生息し、一部は越冬する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

春期は3月下旬から5月中旬頃まで、秋期は7月から10月にかけて主に広大な干潟に生息し、一部は越冬する。単独から数羽で見られることが多く、主にカニ類などを捕食する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の主な生息地は、庄内川河口周辺・藤前干潟、矢作川河口周辺、汐川干潟などに限られている。最も重要な生息地は伊勢湾奥部であり、1970年代には20羽以上の越冬群が見られたが、近年は数羽と大きく減少した。他の地区では、1～2羽が越冬するに過ぎない。伊勢湾奥部は、本州における本種の生息地として重要だが、干潟が消失し生息環境が悪化した。

【保全上の留意点】

現存する干潟を保全するとともに、沿岸部で失われた湿地の再生に努めることが望ましい。

【関連文献】

- 桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.236. 文一総合出版, 東京.
辻 淳夫, 1987. 藤前干潟の価値と重要性. 名古屋港の干潟を守る連絡会, 名古屋.
藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之, 1997-1999. シギ・チドリ類全国カウント報告書 vol.1-vol.6. 日本湿地ネットワークシギ・チドリ委員会, 豊橋.
真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.134-135. 世界文化社, 東京.

ヤマシギ *Scolopax rusticola* Linnaeus

【選定理由】

冬期に、主に平野部から丘陵地にかけての雑木林やその周辺の農耕地などで見られるが、沿岸部の埋立地に作られた植生や干拓地内の新しい農地などでも観察されている。本来の生息地では生息環境が悪化しており、沿岸部の新しい生息地は環境の変遷が早く安定しないことで、県内での確認数が減少していることから、初版情報不足から準絶滅危惧と評価された。

【形態】

全長 33～35cm。額は灰色で後頭に太い黒褐色の横帯が4本あり、背面は赤褐色に黒色や灰白色の複雑な斑がある。下面は淡灰褐色で黒褐色の横斑がある。尾羽は黒褐色で赤褐色の横斑があり、先端部は灰色。雄は、雌に比べて尾羽が長く嘴が短い。



愛知県知多半島, 1987年12月25日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

ユーラシア大陸北部、中部で繁殖し、冬期は南下するものがある。日本には、北海道から本州中部、伊豆諸島で繁殖し、冬期は、本州、四国、九州、沖縄に生息する。

本県では、冬期に平野部や丘陵地に生息し、山間部でも記録がある。

【生息地の環境 / 生態的特性】

冬期に雑木林やその周辺の農耕地、樹木の多い公園や緑地などで単独から数羽で生息する。山麓の水田、農耕地の堆肥置場、時に公園の芝生などで、夕方から夜間にかけてミミズなどの小動物を捕食する。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内では、平野部から丘陵地が本来の生息地と考えられるが、沿岸部の埋立地や干拓地に作られた新しい植生にも生息することが知られている。本来の生息地は開発や道路建設、農業形態の変化等で生息環境が悪化している。沿岸部にできた新しい環境は一時的であることが多く、植生が安定するとともに姿を消すことが大半である。

【保全上の留意点】

県内のみならず国内における生息数がかなり少ない種であることから、早急に狩猟鳥の指定から除外することが望ましい。

【特記事項】

新しく造成された公園や工場の緑地などで、造園のために施肥されたミミズの多い環境を好むことが知られている。また、沿岸部にある市街地の、湿潤な庭のある民家で保護された例もあることから、ミミズの生息できる環境があれば市街地でも飛来の可能性が考えられることで、この種の保護にはこうした環境の造成が効果的と考えられる。

【関連文献】

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.242. 文一総合出版, 東京.
真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.138. 世界文化社, 東京.

アオシギ *Gallinago solitaria* Hodgson

【選定理由】

冬期に、県内の山間部や丘陵地の河川や水路などに生息するが数は少ない。人の立ち入りが少なく静かな環境を好むが、道路建設や各種の開発によりこうした環境が消失していることから、絶滅が危惧される。県内の生息状況について近年多くの情報が得られていることで、初版情報不足から準絶滅危惧と評価された。

【形態】

全長 29～31cm。国内に分布するタシギ属の中では体が最も大きい。頭中央は白色で上面に黒褐色と赤褐色の斑が複雑にあり、肩羽に白斑がある。胸はオリーブ褐色で細かい横斑が密にあり、下面は白色で脇に褐色の太い横斑がある。他のタシギ属と異なり、採餌時に体を上下に振る動作を行う。



京都府宇治市, 1986年1月2日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

シベリア東部および中部、ヒマラヤ北部、サハラ以南で繁殖し、冬期は中国南部、インド、に生息する。2 亜種に分けられる日本には、冬期に生息し全国的に記録があるが本州中部以南では少ない。

本県では、冬期に山間部や丘陵地の河川や水路、水田などに生息するが、生息数はごく少ない。

【生息地の環境 / 生態的特性】

冬期に、山麓の水田、周辺の水路、砂防堰堤の下などに単独で生息する。開けた場所に姿を見せることは少なく、目につき難い。ジェットと鳴き、低く重そうに飛ぶ。人の気配を感じると近づく前に飛去することが多いため、観察者が存在に気付かない場合が多い。英名 **Solitary Snipe** の通り、越冬期は単独で生活するため、県内では春の渡りの季節に近い 4 月に 2 羽で確認された記録が 1 例あるのみで、他はすべて単独の記録である。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

丘陵地から山地の農地周辺にある比較的浅い谷間や水路に生息するが、人の立ち入りの頻繁な場所には生息できないため、生息場所は限られている。近年こうした場所で圃場整備や農道整備が進められており、さらに企業団地や住宅団地開発、基幹道路整備や高速道路建設等が行われていることで、生息環境は減少し続けている。

【保全上の留意点】

世界的に希少な種と考えられている。県内では主に西三河の平野に近い丘陵地や山間部で継続的な飛来が知られているが、その大半が高速道路建設と工業用地開発、及びその付帯工事の対象とされており、すでに生息の確認がされなくなった地域が数箇所発生している。典型的な里山環境を生息地とする種であることから、保全には特別な配慮が必要である。新しい開発を優先することなく、既設の道路や開発部分を整備することで、良好な自然環境を保存する努力が必要である。

【関連文献】

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.248. 文一総合出版, 東京.
真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.140. 世界文化社, 東京.

コアジサシ *Sterna albifrons* Pallas

【選定理由】

夏期に伊勢湾、三河湾の沿岸部に生息し普通に見られるが、繁殖地は局地的である。大規模な繁殖地は埋立造成地に限られており、こうした環境は変動性が高く、1年から数年で消失してしまう。県内にはこの種が何年も継続して繁殖できる安定した生息環境が無いいため、年を追う毎に生息数は減少している。

【形態】

全長約 22～28cm、翼開長 47～55cm。上面は青灰色で下面は白色。尾は白色で、外側尾羽が長く飛翔時は燕尾状に見える。夏羽は、頭頂から後頭にかけて黒色で、額は白色で過眼線は黒色、嘴は黄色で先端が黒色、脚は橙黄色。冬羽は、額の白色が頭頂まで広がり、嘴と脚は黒色。幼羽は、冬羽に似るが背に褐色の小斑があり、嘴の基部や脚に赤味のある個体もある。



愛知県西尾市, 1988年8月4日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

ヨーロッパ、ロシア西部、中東、インド、東南アジア、オーストラリア、アフリカ、北アメリカ中部から南アメリカ北部で繁殖し、北方のものは冬期に南下し越冬する。7～10亜種に分けられる。日本には、夏期に主に本州以南に生息し繁殖する。

県内では、夏期に伊勢湾、三河湾沿岸および河口部で繁殖し、平野部の水辺で見られる。春から初夏にかけては、遠州灘沿岸でも見られる。

【生息地の環境 / 生態的特性】

県内には4月中旬に渡来し、夏期に、海岸、河口、河川、内陸の湖沼などの水辺に生息する。水面上空を飛び時に停空飛翔を行い、餌の小魚を見つけると水中に飛び込み捕食する。沿岸部の埋立造成地、畑地、河川の中州などでコロニーを形成し繁殖する。営巣は、地上に小さなくぼみを作り小石や貝殻を敷き、通常2～3卵を産む。繁殖後は、淡水の水溜りのある広い砂地に大群で集合する。秋の渡りの前には、こうした環境を求めて移動するが、県内で繁殖したものが静岡県以東で確認された例もある。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

名古屋港内、衣浦港内、三河港内等の埋立造成地で数百から数千羽規模の大きなコロニーを形成するが、事業所の立地等による土地の改変や植相の遷移による環境の変化などにより、繁殖環境は安定しない。また、河川敷や畑地で形成される小規模な繁殖地も、河川改修や耕作などによる攪乱を受けるため繁殖条件は良くない。

【保全上の留意点】

種の保存法で「国際希少野生動植物種」に指定されており、伊勢湾および三河湾は、本種にとって東京湾と並ぶ国内で最も重要な生息地ということが出来る。本種が安定的に繁殖できる環境を、沿岸部や河口域に確保・創出していく必要がある。

【関連文献】

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.307. 文一総合出版, 東京.

ツツドリ *Cuculus saturatus* Blyth

【選定理由】

夏期に、丘陵地から山間部の林に生息し繁殖していると考えられる。県内における生息状況は必ずしも明らかでないが、繁殖期の生息数は確実に減少している。

【形態】

全長 32cm。頭部から上面および顔から胸にかけて濃い灰色で、腹から下尾筒にかけては白色で黒い横縞があり、尾は黒褐色で白斑がある。眼の周りに黄色のアイリングがあり、虹彩は橙色で脚は黄色い。雌では赤色型があり、頭部から上面および顔にかけて赤褐色で黒褐色の斑がある。幼羽は、頭部から上面および顔が黒褐色で、各羽の先端に汚白色の小斑があり、虹彩は暗色。



奈良県, 1974年10月1日, 石井照昭 撮影

【分布の概要】

西シベリアからカムチャツカ、サハリン、オホーツク海沿岸から中国東南部、台湾、マレー半島、ジャワ、ボルネオ北部で繁殖し、東南アジア、ニューギニア、ニューギニア北部で越冬する。日本には、夏期に九州以北に生息し繁殖する。

県内には、夏期に主に東三河地方の山間部に少数が生息する。春と秋の渡り時期には、市街地でも記録されることがある。

【生息地の環境 / 生態的特性】

4月下旬頃に渡来し、夏期に広葉樹林や針広混交林に生息し、主にセンダイムシクイに託卵し繁殖していると考えられる。竹筒を吹いたような低い声で、ポポッ、ポポッと鳴く。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の山間部で繁殖期に生息が確認されているが、数は少なく生息状況は明らかでない。段戸裏谷では、1970年代と比較して数が減少しており、その他の地域においても、繁殖期の観察報告が減少している。

【保全上の留意点】

広葉樹林や針広混交林の保全に努め、中長期的には新たに創出していくことが望ましい。

【関連文献】

- 五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.75. 文一総合出版, 東京.
緒方清人, 1974-1998. 野生鳥類生息調査報告書(段戸裏谷). 愛知県農地林務部.
樋口広芳, 1991. 日本のカッコウ類の託卵相手. 朝日百科 動物たちの地球 22, pp.296-299. 朝日新聞社, 東京.

オオコノハズク *Otus lempiji* (Horsfield)

【選定理由】

夏期は丘陵地および山間部の林で繁殖し、冬期は平野部の雑木林や工業地帯のグリーンベルトなどにも生息するが数は少ない。県内における繁殖期の生息確認記録は何例か知られているが、2008年に行った夜間調査では繁殖期の確認がされなかったことから、繁殖期の生息数はかなり少ないものと考えられ、初版情報不足から準絶滅危惧と評価された。

【形態】

全長 24～25cm。全身が灰褐色で上面は黒色や灰色の複雑な斑があり、胸に黒褐色の虫食い状の斑がある。後頸に灰白色の大きな斑があり、耳の羽角は長めで目の色は橙色。趾に羽毛がある。



長崎県対馬, 1985年5月3日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

ネパール、中国東北部、朝鮮半島、台湾、マレー半島、大スンダ列島、バリ、カンゲアン諸島に分布する。日本では、小笠原諸島を除く全国で繁殖し、北方のものは冬期に南下する。南西諸島に生息するものは亜種リュウキュウオオコノハズク *O. l. pryeri* に区別される。

県内では、丘陵地および山間部の林で繁殖し、冬期は平野部の雑木林にも生息する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

樹洞で繁殖し、夜間に小型の鳥類や哺乳類、昆虫などを捕食する。人家の軒先、巣箱で営巣することもある。冬期は、平野部の林で罅（ねぐら）が見つかることがある。ウォツ、ウォツと鳴く。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

繁殖については、尾張地方と西三河地方の丘陵地や山間地で、繁殖期に鳴き声や姿が確認されており、巣箱に営巣した例も報告されている。冬期は、丘陵地や平地の雑木林、社寺林、屋敷林、臨海部の緑地などで記録がある。また、晩秋から初冬にかけては、自動車やガラスとの衝突事故などで保護される例が稀ならずある。夜行性で観察し難いため生息状況は明らかでないが、樹洞のある木が少なくなっていることから生息条件が悪化しているものと考えられる。

【保全上の留意点】

沿岸部から丘陵地の雑木林を保全するとともに、山間部にある古い社寺林の保全や巣箱の設置など営巣環境を整備することが望ましい。

【特記事項】

東南アジア、バリ、カンゲアン諸島に分布するものを *Otus lempiji* とし、東シベリアから日本国内で繁殖するものを *Otus semitorques* と別種に扱う説がある。

【関連文献】

五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.88. 文一総合出版, 東京.
Koning C., Helm Weick, 1999. Owls, A guide to the owls of the world. pp.92-95. Pica press, London.

アオバズク *Ninox scutulata* (Raffles)

【選定理由】

夏期に平野部から丘陵地および山間部の林に生息し繁殖するが、営巣に必要な樹洞のある大木が少なくなっていること、人工光の増加による餌となる昆虫類の減少等により、2000年以降は平野部からの繁殖記録がほとんど無くなっており、丘陵地や山間部でも生息数が減少している。

【形態】

全長 29cm。頭部および顔は一様な濃灰褐色で、羽角はなく虹彩は黄色。上面は一様な濃褐色で、下面は白色で濃褐色の太くて粗い縦斑がある。尾は淡褐色で濃褐色の太い横縞がある。

【分布の概要】

インド、ヒマラヤ、東南アジア、中国東部、朝鮮半島、ウスリーで繁殖し、北方のものは冬期に南下する。日本では、ほぼ全国に分布し、九州以北では夏期に生息し、南西諸島では周年生息する。南西諸島のものは、亜種リュウキュウアオバズク *N. s. totogo* に区分される。その他に、北海道などで亜種チョウセンアオバズク *N. s. macroptera* の迷行的な記録がある。

県内には、夏期に平野部から丘陵地および山間部の林に生息し、繁殖する。



愛知県安城市, 1988年7月18日, 杉山時雄 撮影

【生息地の環境 / 生態的特性】

県内では4月下旬に渡来し、社寺林などの樹洞で繁殖する。夜間に電線などに止まり、主な餌である甲虫、セミ、ガなどの昆虫類を空中で捕獲する。ホーホー、ホーホーと繰り返し鳴く。民家の軒先など人工物を利用し営巣した例がある。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

山間部や丘陵部だけでなく、1990年代までは名古屋市内を含め平野部の都市でも繁殖例があった。近年は都市部や都市周辺での繁殖が極めて稀になっているだけでなく、丘陵部や山間部での確認数も減少している。道路照明をはじめとする人工光の蔓延で餌となる昆虫の生息環境が攪乱されていること。都市部ではカラスによる繁殖妨害の他に、写真撮影者による執拗な干渉も減少の原因と考えられる。

【保全上の留意点】

社寺林や都市公園などの大木がある林を保全する必要がある。また、繁殖の可能性がある場所においては、巣箱を設置するなど、営巣環境を整備することが有効と考えられる。郊外や山間部だけでなく、市街地においても夜間必要以上の照明は、餌となる昆虫の生息に大きな影響を及ぼすことになり、結果的に昆虫食の種をはじめ食物連鎖の上位にある種の生息に大きな影響を与えることになる。

【関連文献】

- 青木 進, 1991. アオバズク -青葉の頃日本を訪れる. 朝日百科 動物たちの地球 25, pp.14-15. 朝日新聞社, 東京.
五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.75. 文一総合出版, 東京.
森下英美子・宮崎久恵・樋口広芳, 1997. 夏鳥は減っている? 1996年夏鳥アンケート結果報告. 野鳥 通巻 599号, pp.38-41. 日本野鳥の会, 東京.

フクロウ *Strix uralensis* Pallas

【選定理由】

平野部から丘陵地および山間部の林に周年生息し繁殖するが、営巣に必要な樹洞のある大木が少なくなっており、生息条件が悪化している。

【形態】

全長 50cm。頭部から上面は褐色で、後頸から背にかけて暗褐色の縦斑があり肩羽と雨覆の先端に白斑がある。嘴は黄色。下面は淡褐色で胸に褐色の縦斑がある。顔盤があり暗褐色の斑で縁どられ、羽角はなく、虹彩は暗褐色。尾は長めで濃褐色の太い横縞がある。



愛知県豊田市, 1994年5月1日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

ヨーロッパ北部および東部からオホーツク海西岸、アルタイ地方、モンゴル北部、中国北部および東部、サハリン、朝鮮半島に生息する。日本では、九州以北に周年生息する。国内では、亜種エゾフクロウ *S. u. japonica*、亜種フクロウ *S. u. hondoensis*、亜種モミヤマフクロウ *S. u. momiyamae*、亜種キュウシュウフクロウ *S. u. fuscescens* の4亜種に分けられる。

県内では、平野部から丘陵地、山間部の林に周年生息する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

主に大木の樹洞で繁殖するが、地上で営巣することもある。主として夜間に、農耕地や造林地あるいは河川敷などで、ノネズミやモグラなどの小型哺乳類のほか、鳥類、カエル、昆虫などを捕食する。ゴロスケホッホオと鳴く。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

平野部から丘陵地、山間部の大木が残る林に生息し、山麓の雑木林や社寺林などを好む。本種の生息には、営巣のための樹洞がある大木、休息および巣立雛を育成する場としての背後林、採餌のための開けた農地等が必要であるが、都市化や工業団地等の開発、それに伴う道路建設によりこうした環境が減少している。

【保全上の留意点】

社寺林など大木がある林を中心に、背後の山林および周辺の農耕地を含め、生息環境を一体的に保全することが望ましい。また、繁殖の可能性がある場所においては、巣箱を設置するなど、営巣環境を整備することが有効と考えられる。

【特記事項】

西三河地方を中心に、1991年以降フクロウ用の巣箱の設置が取り組みされており、成果が確認されている。

【関連文献】

五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.88. 文一総合出版, 東京.
杉山時雄, 1998. フクロウ用巣箱の必要性. 西三河野鳥の会研究年報 VOL.1, pp.11-12. 西三河野鳥の会, 豊田市.

サンショウクイ *Pericrocotus divaricatus* (Raffles)

【選定理由】

夏期に山間部や丘陵地の林に生息し繁殖するが、1980年代以降数が著しく減少した。野鳥の生息数は周期的な増減を示し、サンショウクイは現在その増加期と推測される。近年県内における生息数が回復していることで、初版の絶滅危惧Ⅱ類から準絶滅危惧と評価されたが、今後の推移を注視する必要がある。

【形態】

全長20cm。頭上から後頸にかけては黒色、背は灰色で下面は白色。顔は、黒い過眼線があり眉斑と額は白色。尾は長くて黒色。



石川県舳倉島, 1989年5月3日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

ウスリー、朝鮮半島で繁殖し、冬期はフィリピン、中国南部からマレー半島、スマトラ、ボルネオなどに移動する。日本には夏期に生息し、本州と四国で繁殖する。別亜種のリュウキュウサンショウクイ *P. d. tegimae* は、南西諸島に周年生息する。

県内には、夏期に山間部や丘陵部に生息し、春と秋の渡り時期には、市街地で記録されることがある。

【生息地の環境 / 生態的特性】

広葉樹林や混交林に生息し、樹上で葉についた昆虫などを捕食する。高木の横枝に、枯茎、細い枝、樹皮を用いてさら形の巣を作り、外部にウメノキゴケをクモの糸で張り付けることが多い。飛びながら、ヒリヒリリッ、ヒリヒリリッと鳴く。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

1980年代半ば頃から全国的な減少傾向が見られ、愛知県でも場所により大きく減少した。近年の全国的な傾向は明らかでないが、愛知県では回復傾向に転じ 2006～2008年の繁殖期では県内の山間部で減少前と同等なまでに回復している。減少増加の要因は明らかでない。

【保全上の留意点】

山間部や丘陵地の広葉樹林を保全する必要がある。

【関連文献】

- 五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.142. 文一総合出版, 東京.
緒方清人, 1996. 段戸裏谷の野鳥. 愛知の野鳥 1996. Pp233-243. 愛知県農地林務部自然保護課.
織田重己他, 2001. 岡崎の野鳥, pp.26-29. 岡崎野鳥の会, 岡崎.
竹下信雄, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.207. 世界文化社, 東京.
成田 進, 1996. 東谷山. 名古屋の野鳥 1994.4-1995.3 名古屋市野鳥生息状況調査報告. 名古屋市農政緑地局農政課.
深見 弘, 1976-1998. 野生鳥類生息調査報告書(香嵐渓). 愛知県農地林務部.
森下英美子・宮崎久恵・樋口広芳, 1997. 夏鳥は減っている? 1996年夏鳥アンケート結果報告. 野鳥 通巻599号, pp. 38-41. 日本野鳥の会, 東京.

ミソサザイ *Troglodytes troglodytes* (Linnaeus)

【選定理由】

夏期は山間部の溪流で繁殖し、冬期は丘陵地の沢沿いにも生息するが、かつてに比べて数が減少しており生息条件が悪化している可能性がある。

【形態】

全長 10～11cm。全身が茶褐色で、風切、尾羽、腹に黒褐色の横斑がある。眉斑は淡褐色で細い。



愛知県北設楽郡設楽町, 1989年4月26日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

ヨーロッパ、アフリカ北部、中東、中央アジア、ロシア極東南部、サハリン、千島、カムチャツカ、朝鮮半島、台湾、北アメリカで繁殖し、北方のものは冬期に南下する。日本では、大隅諸島以北に周年生息し繁殖するが、冬期に暖地へ移動するものもいる。

県内では、山間部に周年生息し繁殖し、冬期は丘陵地や平野部でも見られる。

【生息地の環境 / 生態的特性】

夏期は、山間部のよく茂った林、特に溪流に沿いの湿った場所に生息し、木の根元、倒木、岩のくぼみなどにコケを主材とする球状の巣を作り繁殖する。冬期は、丘陵地の沢沿いのやぶや崖地にも生息する。ツィリリリチャヒヒチリリ・・・など複雑でよく通る大きな声で囀る。地鳴きは、チョッ、チョッと聞こえる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

段戸裏谷では、1980年代以降に繁殖期の数が減少している。岩屋堂など丘陵地では、冬期の観察記録が少なくなっている。減少の要因は明らかでないが、繁殖地である比較的標高の高い山地にある溪流周辺の環境が悪化しているものと考えられる。

【保全上の留意点】

溪流や沢沿いの森林の保全に努める必要がある。

【関連文献】

- 五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.155. 文一総合出版, 東京.
緒方清人, 1974-1998. 野生鳥類生息調査報告書, 段戸裏谷. 愛知県農地林務部.
竹下信雄, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.212. 世界文化社, 東京.
花井 啓, 1996. 岩屋堂の野鳥. 愛知の野鳥 1995, pp.208-227. 愛知県農地林務部自然保護課.

コルリ *Luscinia cyane* (Pallas)

【選定理由】

夏期に山間部の主に落葉広葉樹林に生息するが、繁殖地は1,000mに近い標高にある原生林か二次林に限定されるため、県内における繁殖地は限られている。夏鳥の小鳥では20年程度の周期で増減を繰り返しているように見られ、現在はその増加期にあると考えられるが、繁殖地の環境は必ずしも良好に保全されている状態でないことから今後大きく減少する可能性がある。

【形態】

全長14cm。雄は、頭頂から上尾筒にかけて上面が一様な暗青色で、喉から下尾筒にかけて下面は白色、額は明るい青色で、目先から側胸にかけて黒色部がある。雌は全体がオリーブ褐色で、腰から尾にかけて青色味があるものが多い。脚は長めで肉色。



石川県舳倉島, 2002年5月5日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

シベリア南部からアムール、サハリン、中国東北部、朝鮮半島で繁殖し、冬期はインドのアッサムから東南アジアに生息する。日本では、夏期に北海道から本州中部に生息し繁殖する。

県内では、夏期に山間部の落葉広葉樹林に生息し繁殖する。春と秋の渡り時期には、市街地でも記録されることがある。

【生息地の環境 / 生態的特性】

山間部の落葉広葉樹林のササ類など下草が密生する場所に生息し、地上の物陰に広葉樹の枯枝や枯葉を主材とするわん形の巣を作る。下草の中からはめったに出ない。チツ、チツ・・・と次第に早くなる前奏のあとに、ヒン、カラララ・・・と大きな声で囀る。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の生息地としては、段戸裏谷、面の木峠、茶白山など標高1,000mに近い場所にある原生林や二次林が知られるが、生息地は比較的限定されており数も少ない。段戸裏谷では、1990年代から緩やかな減少傾向にある。

【保全上の留意点】

山間部の落葉広葉樹林を保全するとともに、中長期的には新たに創出していくことが望ましい。

【特記事項】

県内における主要な生息地である段戸裏谷では、2000年頃から外来種のソウシチョウ *Leiothrix lutea* が侵入しており、本種との競合が懸念される。

【関連文献】

五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.165. 文一総合出版, 東京.
緒方清人, 1996. 段戸裏谷の野鳥. 愛知の野鳥 1996, pp.233-243. 愛知県農地林務部自然保護課.
竹下信雄, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.217. 世界文化社, 東京.
原田猪津夫, 1983-1998. 野生鳥類生息調査報告書(茶白山). 愛知県農地林務部.

クロツグミ *Turdus cardis* Temminck

【選定理由】

夏期に原生林や二次林に生息するが、分布が局地的で数は少ない。近年県内各地の二次林で繁殖期の確認例が増えていることで、初版絶滅危惧Ⅱ類から準絶滅危惧と評価されたが、今後の推移を注視する必要がある。

【形態】

全長 21.5cm。雄は腹と下尾筒が白いほかは全身が黒色で、腹の上部から脇に三角形の黒斑があり、嘴と脚は黄色で眼の回りに黄色の縁取りがある。雌は上面がオリーブ色味のある暗褐色、下面は白色で黒褐色の斑があり、脇と下雨覆は橙褐色。



石川県舩倉島, 1996年5月3日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

中国中部の山地と日本の九州以北で繁殖し、中国南部とインドシナ半島北部で越冬する。

県内では、夏期に丘陵地から山間部に生息し、春と秋の渡り時期には市街地でも見られることがある。

【生息地の環境 / 生態的特性】

丘陵地から山間部にかけての混交林や明るい針葉樹林に生息し繁殖する。地上で昆虫やミミズを捕食するほか、樹上で木の実を食べることもある。囀りは、キョローン、キョローン、キョコキョコなどパターンが複雑で音量が豊か。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

低山帯から標高 1,000m を越える茶臼山まで生息し、他の大型ツグミ類に比べて垂直分布は広いが、局地的で数は少ない。低山帯での繁殖場所は、自然性の高い二次林に限られている。

【保全上の留意点】

面の木峠や段戸裏谷の原生林は勿論のこと、県内各地の山地や丘陵地に残存する自然性の高い二次林の保全に努めることが必要である。

【関連文献】

五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.185. 文一総合出版, 東京.

竹下信雄, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.224. 世界文化社, 東京.

原田 進, 1981. 東三河野鳥生息状況調査報告書(1). 東三河野鳥同好会, 豊橋.

コサメビタキ *Muscicapa dauurica* Pallas

【選定理由】

夏期に丘陵地から山間部にかけての二次林や原生林に生息するが数は少なく、渡りの季節を含め県内での確認数が減少していることから、減少傾向にあると考えられる。

【形態】

全長 13cm。上面は灰褐色で、雨覆と風切は褐色味が強く羽縁が淡黄褐色。胸と脇は淡い灰褐色で下胸から腹にかけては白っぽい。眼の周辺に白い縁取りがあり、眼先は白色で褐色の顎線がある。嘴は黒色で下嘴の基部は橙黄色。脚は黒色。



愛知県渥美半島, 2004年10月2日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

インド、ヒマラヤ、バイカル湖周辺からアムール、ウスリー、中国東北部、サハリンで繁殖し、冬期はインドから中国南部、東南アジアに生息する。日本では、夏期に九州以北に生息し繁殖する。

県内では、夏期に山間部の落葉広葉樹林に生息し繁殖する。春と秋の渡り時期には、市街地の公園などにも渡来する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

丘陵地から山間部の明るい落葉広葉樹林に生息し、飛翔する昆虫を捕食する。高木の枝の上に、蘚苔類と樹皮を主材とし表面にウメノキゴケをクモの糸ではりつけたさら形の巣を作る。ツィーチリリチョピリリなど細く複雑な声で囀る。地鳴きは、ツイ、ツイと聞こえる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

茶臼山、段戸裏谷、漆島川（豊根村）、乳岩川（新城市）、猿投山、本宮山、内海など、山間部から丘陵地で繁殖期の記録があるが、数は少ない。1970年代に岩屋堂で営巣が確認されているが、近年は繁殖期の記録が減少している。また、段戸裏谷では、1980年以降緩やかに減少し近年は繁殖期の記録がほとんどなくなった。

【保全上の留意点】

丘陵地から山間部にかけての落葉広葉樹林を保全し、中長期的には新たに創出していくことが望ましい。

【関連文献】

五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.235. 文一総合出版, 東京.
緒方清人, 1996. 段戸裏谷の野鳥. 愛知の野鳥 1996, pp.233-243. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.
竹下信雄, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.240. 世界文化社, 東京.

サンコウチョウ *Terpsiphone atrocaudata* (Eyton)

【選定理由】

10年以上の長い周期で増減を繰り返しており、現在はその増加期にあると考えられるが、減少期には絶滅の危険性が感じられる程急激に減少する。

【形態】

全長は雄が44.5cm、雌が17.5cm。雄は、中央尾羽1対が非常に長く、頭部と胸は黒色で後頭に冠羽があり、眼の回りの縁取りと嘴は鮮やかなコバルトブルーで、背は紫褐色、腹と下尾筒は白色。雌及び若鳥は、雄に比べて尾が短く、頭部と胸が灰黒色で背は茶褐色。



愛知県額田郡幸田町, 1988年6月25日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

台湾、フィリピンで繁殖し、冬期は中国南部、インドシナ、スマトラ、マレー半島に生息する。日本では、夏期に本州以南に生息し繁殖する。南西諸島には、別亜種のリュウキュウサンコウチョウ *T. a. illex* が周年生息する。

県内では、夏期に主に平野部から丘陵地の林に生息し繁殖する。山間部でも記録があり春と秋の渡りの時期には、市街地の公園で見られることがある。

【生息地の環境 / 生態的特性】

沢やスギ・ヒノキの植林地とその周辺。高木の細い枝にスギやヒノキ樹皮を主材料とし表面にウメノキゴケをクモの糸ではりつけた深いコップ形の巣を作る。飛翔する昆虫を主食とする。フィーチー、ホイホイホイと柔らかな声で囀る。地鳴きは、ギィ、ギィと聞こえる。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

1970年代までは猿投山や闇菰溪谷など、古い針葉樹林のある溪谷でごく少数が繁殖する夏鳥であった。80年代から次第に分布を広げ平野部に近い針広混交林でも繁殖するようになったが、90年代の後半からは再び減少してしまった。近年は増加傾向にあり前回の増加時と同等になっているが、増減の理由が不明であることから、絶滅危惧のランク変更については今後10年程度観察する必要がある。

【保全上の留意点】

この種の生息環境である、主に沢沿いに植林され50年以上経過した針葉樹林と、周辺に残された広葉樹を中心とする二次林が混在する環境を保全することが重要と考えられる。

【関連文献】

- 五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.237. 文一総合出版, 東京.
竹下信雄, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.240-241. 世界文化社, 東京.
森下英美子・宮崎久恵・樋口広芳, 1997. 夏鳥は減っている? 1996年夏鳥アンケート結果報告. 野鳥 通巻 599号, pp.38-41. 日本野鳥の会, 東京.

サンカノゴイ *Botaurus stellaris* Linnaeus

【選定理由】

県内では、伊勢湾、三河湾の沿岸部で渡りの季節や冬期、繁殖期などに記録はあるが、観察例が少なく継続的なものではないことから情報不足とした。ただし、継続的な生息が確認できた場合は、環境省の区分に準じた絶滅危惧 I B類に相当すると考える。

【形態】

全長 64～80cm。全身が淡黄褐色で、頭頂は褐色で上面には褐色の虫くい状の斑がある。顎線と頸から胸にかけての縦斑は、褐色で太く明瞭。飛翔時は、風切に褐色の横帯が出る。



千葉県, 1999年6月12日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

ユーラシア中部、北アフリカ、南アフリカで繁殖し、北方のものは冬期に南下し、アフリカ、南アジア、東南アジアに生息する。日本では、北海道、茨城、千葉、滋賀で繁殖し繁殖地の周辺では周年生息する。その他の本州以南では冬期に生息し、北海道では主に夏期に生息する。

本県では、伊勢湾・三河湾沿岸部のヨシ原で記録がある。

【生息地の環境 / 生態的特性】

広いヨシ原の中に生息し、魚類、カエル、昆虫、時には小鳥も捕食する。開けた場所に姿を表すことは少ないが、繁殖地では夏期にヨシ原の上を時々飛ぶ。営巣はヨシ原内の地上で行い、通常 4 から 5 卵を産卵する。ポオーツ、ポオーツと太い声で鳴く。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

衣浦港埋立地のヨシ原や一色町の三河湾沿岸部で秋期や冬期に稀に記録され、庄内川河口周辺のヨシ原、一色町で繁殖期の記録があるが継続した観察記録はない。生息状況は不明である。

【保全上の留意点】

伊勢湾・三河湾沿岸部の広大なヨシ原を保全する必要がある。

【関連文献】

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.68. 文一総合出版, 東京.
吉井 正, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.47. 世界文化社, 東京.

サシバ *Butastur indicus* の渡り群

【選定理由】

毎年秋期に伊良湖岬を多数のサシバが通過する。本種の保全にあたっては、渡りの経路・拠点の確保が重要という観点から、ここを渡る地域個体群と捉え、その保全について十分な配慮を行う必要がある。

【形態】

全長 47～51cm、翼開長 102.5～115cm。翼は長くてやや細い。成鳥は、頭から背にかけて赤みのある褐色で、腹に茶褐色の横斑、喉の中央に明瞭な縦線が 1 本あり、目は黄色。雄成鳥は、頭部に灰色味が強い。幼鳥は、上面に赤味がなく胸から腹にかけて縦斑、汚白色の太い眉斑があり、目は暗褐色。飛翔時の下面は白っぽく、翼がやや細めに見え、尾羽に横帯、風切に横斑がある。



愛知県田原市伊良湖岬, 1985年10月10日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

アムール地方南部、ウスリー地方、中国東北部、朝鮮半島北部、および日本で繁殖し、南西諸島、台湾、中国南部、ミャンマー、インドシナ、マレー半島、フィリピン、ボルネオ、マルク諸島、ニューギニアなどで越冬する。国内では、北海道を除く全国で繁殖し、南西諸島では少数が越冬する。

県内では、夏期に丘陵地から山間部に生息し繁殖する。秋の渡り時期には平野部でも見られる。

【生息地の環境 / 生態的特性】

渥美半島は、豊橋市から太平洋～志摩半島に向かい西に細長く伸びた特異な地形で、約 200～300m の低山が連なる。中部地方以東のサシバにとっては、陸地づたいに上昇気流を利用しながら効率的に越冬地の南西方向に進むことができるため、その先端に位置する伊良湖岬では、渡り途中の個体が数多く観察できるものと考えられている。また、渥美半島の山林は、渡り途中の休息地としても重要な役割を果たしている。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

伊良湖岬におけるサシバの秋期の渡りは、大半が 9 月の終わりから 10 月上旬の間に集中する。シーズン毎の総数は、概ね 1989 年以前が約 15,000～18,000 羽、1990 年以降が約 10,000～14,000 羽であり、現時点で減少傾向を示している。

サシバは、県内各地の丘陵地で姿を消しており、繁殖環境を保全することの必要性はいうまでもないが、これだけ多数が毎年利用している渡りの経路・拠点を確保することは、本県以東で繁殖する個体群さらには本種全体の保全を考えるうえで極めて重要である。

【保全上の留意点】

伊良湖岬を始めとする渥美半島の地形および山林を総合的に保全する必要がある。また、十分な調査を行い、通過個体数の把握ならびに渡りの経路の解明に取り組むことが望ましい。

【関連文献】

伊良湖岬の渡り鳥を記録する会, 2000. 伊良湖岬のタカの渡り. タカの渡り 2000, pp.36-46. タカの渡り全国集会 in 信州実行委員会, 長野.

辻 淳夫, 1990. 伊良湖岬でのタカと小鳥の渡り. 日本の生物 第 4 巻 第 6 号. pp.22-29. 文一総合出版, 東京.

森岡照明・叶内拓也・川田 隆・山形則男, 1995. 図鑑 日本のワシタカ類. pp.172-183. 文一総合出版, 東京.

ダイゼン *Pluvialis squatarola* の越冬群

【選定理由】

藤前干潟および庄内川河口周辺、汐川干潟、伊川津干潟および福江湾周辺のダイゼンの越冬群は、全国有数あるいは本州最大級の規模であり、本種の国内における生息状況を鑑みて、特に保全に対する配慮が必要な地域個体群といえることができる。また、干潟に対する依存度が特に高いことから、分布が局地的で、生息条件の悪化により急速に数を減らす可能性がある。

【形態】

全長 27～31cm、翼広長 71～83cm。夏羽は、頭頂から後頸にかけて白色で黒色の斑が散在し、肩羽と雨覆および三列風切は黒褐色で白色の斑が数多くあり、顔から前頸、胸、腹にかけては黒色で、額から眉、側胸にかけて幅広い白色帯がある。冬羽は、頭および上面が褐色で白色の羽縁があり、顔から胸にかけては淡褐色で腹は白い。幼羽は冬羽に似るが、上面の羽縁および三列風切の白斑が明瞭。腰は白色で、尾羽に細い黒色の横帯が、脇に大きな黒色斑がある。後趾がある。



愛知県田原市, 2002年10月13日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

ユーラシア北部から北アメリカ北部で繁殖し、ヨーロッパ、アフリカ、インド、東南アジア、オーストラリア、南北アメリカの海岸で越冬する。日本には、春と秋の渡り時期に渡来し、本州中部以南で越冬する。

県内では、冬期および春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸の干潟に生息する。春期は渡り途中と考えられるものも加わり、数が増加する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

干潟に群をなして生息し、ゴカイ類、甲殻類、二枚貝などを捕食する。ピューイ、ピューイと澄んだ声で鳴く。沿岸域の広大な干潟に対する依存度が特に高い種であり、内陸部ではほとんど見られない。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

近年に行われたシギ・チドリ類の全国調査によると、冬期(12～2月)の観察最大数の合計が35箇所で2,414羽(環境庁, 2000)、春期(3～5月)の観察最大数の合計が73箇所で3,900羽(藤岡ほか, 1999)となっている。

本州以北で冬期に本種のまとまった群が見られる地域は、東京湾(千葉県沿岸)、伊勢湾・三河湾にはほぼ限られ、県内では、藤前干潟および庄内川河口周辺で約100～150羽、汐川干潟で約100～150羽、伊川津干潟および福江湾周辺で約100羽が越冬している。

【保全上の留意点】

採餌場所としての干潟を保全するとともに、干潟が水没した時などに退避できる場所(ねぐら)の確保・創出に努める必要がある。干潟性鳥類の代表種であり、継続的に調査を行い生息状況を把握することが望ましい。

【引用文献】

環境庁, 2000. 平成11年度冬期シギ・チドリ類個体数変動モニタリング調査報告書 速報, pp.15-25. 東京.
藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之, 1999. シギ・チドリ類全国カウント報告書 1998年春, pp.10-34. 日本湿地ネットワークシギ・チドリ委員会, 豊橋.

【関連文献】

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.191. 文一総合出版社, 東京.

ハマシギ *Calidris alpina* の越冬群

【選定理由】

藤前干潟および庄内川河口周辺、境川から矢作川および矢作古川周辺、汐川干潟、伊川津干潟および福江湾周辺のハマシギの越冬群は、全国有数あるいは本州最大級の規模であり、本種の国内における生息状況を鑑みて、特に保全に対する配慮が必要な地域個体群ということが出来る。個体数そのものは多いが、生息条件の悪化により急速に数が減少する可能性がある。

【形態】

全長 16～22cm、翼広長 28～45cm。夏羽は、頭頂と上面は赤褐色で黒褐色の斑が散在し、顔と後頸は白っぽく胸に細かな黒褐色の縦斑があり、腹には大きな黒色斑がある。冬羽は、頭頂、後頸から上面全体にかけて一様な灰褐色で、喉から胸、腹にかけて。幼羽はやや夏羽に似るが、淡褐色の雨覆の羽縁が明瞭で、肩羽の黒褐色の軸斑が大きく、腹に黒色斑が点在する。嘴は長めでやや下に曲がり、飛翔時は風切羽に白帯がでる。



愛知県知多郡東浦町, 1990年11月11日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

ユーラシアおよび北アメリカの北極海沿岸で繁殖し、中国南部、中東、地中海沿岸、北アメリカ東部および西海岸などで越冬する。6亜種に分けられる。日本には、春と秋の渡り時期に渡来し、本州以南で越冬する。

県内では、冬期および春と秋の渡り時期、に伊勢湾、三河湾沿岸の干潟や河川、水溜まりなどに生息する。春期と秋期は、渡り途中と考えられるものも加わり、数が増加する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

冬期は、干潟や河川などに群をなして生息し、ゴカイ類や甲殻類を捕食する。ジュージ、ジュージと鳴く。春期は水田などの淡水湿地、秋期は埋立地の水溜まりなどにも渡来し、内陸部の河川で小さな群が見られることもある。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

近年に行われたシギ・チドリ類の全国調査によると、冬期（12～2月）の観察最大数の合計が30箇所で28,941羽（環境庁、2000）となっている。

本州以北で冬期に本種のまとまった群が見られる地域は、東京湾（千葉県）、伊勢湾・三河湾にほぼ限られる。県内では、藤前干潟・庄内川河口周辺で約2,000羽（ごく近年まで約5,000羽が越冬しており、近隣地区に一時的に移動している可能性がある。）、境川河口および矢作川河口で約500～1,000羽、汐川干潟で約2,000羽、伊川津干潟および福江湾周辺で約800羽が越冬している。

矢作川河口周辺では、1980年代始めまでは約2,000～3,000羽が見られたが、それ以降、著しく減少した。藤前干潟・庄内川河口周辺でも減少している可能性がある。干潟の減少など、生息条件の悪化により、急速に数を減らすおそれがある。

【保全上の留意点】

採餌場所としての干潟を保全するとともに、干潟が水没した時などに退避できる場所（ねぐら）の確保・創出に努める必要がある。干潟性鳥類の代表種であり、継続的に調査を行い生息状況を把握することが望ましい。

【引用文献】

環境庁, 2000. 平成11年度冬期 シギ・チドリ類個体数変動モニタリング調査報告書 速報, pp.15-25. 東京.

【関連文献】

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.208-209. 文一総合出版, 東京.

藤岡エリ子・藤岡純治・稲田浩三・桑原和之, 1999. シギ・チドリ類全国カウント報告書 1998年春, pp.10-34. 日本湿地ネットワークシギ・チドリ委員会, 豊橋.

